

植	物	
防	疫	
講	座	

病害編-39 庭木・緑化樹木の病害

法政大学植物医科学センター 堀 江 博 道

はじめに —緑化推進および病害調査の経緯—

緑地や庭園において、「緑」の美しい景観は私たちに安らぎを与えてくれる。また、緑の環境保全効果や防災・減災効果（大規模火災の延焼防止・避難広場としての活用等の役割）も大きいとされ、都市計画の中には、緑地や街路樹等の整備が明確に位置付けられるようになった。ここ半世紀を概観すると、我が国において緑化の意義が目立つようになったのは、まさに大きなイベントの開催時期と符合する。東京オリンピック（1964年）、日本万国博覧会（大阪万博；1970年）、国際科学技術博覧会（つくば科学万博；1985年）、国際花と緑の博覧会（花の万博；1990年、大阪）等が続き、そしてここ数年は、東京2020オリンピック（2021年予定）へ向けた緑地整備等が盛んであった。

いま私たちは身近に「緑化」をうるおいと感じとれるが、緑化という言葉が使われた当初は、第二次大戦後の山野の荒廃に対応する「国土緑化」なのであった。次いで、戦後長く続いた高度経済成長期の負の遺産とも言うべき、いわゆる公害問題への対応策（街路樹・緑地帯の整備や工場緑化等）として推進された時代もあった。当時は排気ガスや大気汚染に強く、繁殖が容易で、生育も旺盛な、比較的管理が一樣で手間がかからない樹種に需要が集まったのである。

その後、私たちがこれらの緑一辺倒ではなく、より多様な、そして華やかさを希求したのは、花の万博を契機としている。「緑花」という言葉も花の万博から定着したような印象がある。また、管理の難しさから敬遠されがちであった、サクラやハナミズキ等の花木が、街路樹として人気を高めたのもその時期からである。今日では、この2樹種が街路樹の栽植本数の上位を占めている。また、人々のニーズが多様化しており、今まであまり顧みられなかった、野や山に生える多くの樹種が緑地の植栽に利用されるようになった。なかには斑入りの品種・

系統等が選抜・育成され、国外からの新規の導入も盛んで、植栽目的や周辺環境に合わせて選択されている。

一方で、多様な樹種が植栽されて年数を経ると、管理上の問題点も浮き彫りになってきた。その一つが、病気の発生とその被害である。庭木・緑化樹木の病害について、国立林業試験場（現・森林総合研究所）を中心に、茨城・神奈川・鳥根県等、植木生産県などの林業系試験場が協力して、全国規模で本格的に調査が進められたのは、1960年代末から1970年代前半である。同時期、筆者が在籍していた東京都農業試験場（現・東京農林総合研究センター）は独自に、都の行政施策としての街路樹保全対策・海外樹種導入プロジェクトの一環として病害調査を行った（堀江・小林，1980；1983；堀江，1989；堀江ら，2004a）。

東京都は江戸期以来の植木産地であり、植木生産（作付面積・出荷数量）は、1970年代当時から現在まで、全国でのベスト5あたりに位置する。加えてグラウンドカバープランツ（地被植物）の生産は全国トップを長らく維持した。このような背景もあり、筆者らは、その後も庭木・緑化樹木の新病害を多数報告するとともに、発生生態などに関する調査研究を継続的に進め、また、樹木類の農薬登録プロジェクト（後述）にも参加した。筆者らの病害調査の成果は、社会還元の一つとして、出版社の協力も得ながら、技術者・一般向けの図鑑（堀江ら，2001；堀江，2020）に集約して出版された。

本稿では、庭木・緑化樹木の病害について、既往の成果を踏まえつつ、現状と今後の課題等について概説する。ちなみに、記述内容の多くは上記の図鑑（後者）を含め、法政大学植物医科学センター・（一財）農林産業研究所が共同で出版している、植物医科学叢書から引用・転載（一部改変）したものである。なお、いわゆる「エビダンス」（根拠）が十分ではない事項もあるが、筆者の受け止めに「トレンド」（傾向）として示した。

I 発生動向

1 樹木病害の病原別割合と特徴

樹木に発生する既知の病害は、「日本植物病名目録」